

第34次 第6回
宮城県社会教育委員の会議
会議記録

平成29年5月11日(木)

宮城県教育委員会

第34次（第6回）宮城県社会教育委員の会議 記録

- 日 時 平成29年5月11日（木） 午前10時30分～11時30分
- 場 所 宮城県自治会館 202会議室
- 出席委員（15名）

相澤委員	伊勢委員	齊藤委員	坂口委員
佐々木淳吾委員	佐々木とし子委員	澁谷委員	杉山委員
鈴木孝三委員	鈴木正博委員	田中委員	千葉委員
中路委員	星委員	星山委員	
- 欠席委員（0名）
- 事務局

新妻生涯学習課長	今野社会教育専門監	高橋副参事兼課長補佐
山田生涯学習振興班長	成瀬社会教育推進班長	吉田社会教育支援班長
蛭名同課長補佐	丹野同主幹	菅原同主任主査

（司会；蛭名社会教育支援班課長補佐）

・皆様おはようございます。定刻より若干早いのですが、皆様お揃いになりましたので、ただいまから、第34次（第6回）宮城県社会教育委員の会議を開会いたします。

なお、情報公開条例第19条によりまして、県の附属機関の会議につきましては原則公開となっております。本会議につきましても、公開により審議を進めさせていただきます。

異動等で、事務局職員が変更になりましたので、改めて紹介いたします。生涯学習課長新妻直樹です。社会教育専門監今野勝美です。副参事兼課長補佐総括担当高橋秀明です。生涯学習振興班長山田賀子です。社会教育支援班長吉田浩之です。社会教育推進班長 成瀬啓です。協働教育班長石塚靖明は本日別な公務のため欠席です。社会教育支援班主幹丹野涉です。同じく主任主査菅原綾です。本年度社会教育支援班に美術館リニューアル推進チームができました。ここに片平主査、小檜山技師が着任し、リニューアルに向けた業務を行っております。最後になりましたが、私、社会教育支援班副班長蛭名博人です。次回からこの会議の主担当となります。よろしく願いいたします。

それでは、早速、議事に入りたいと思います。以後の進行につきましては、議長をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

（澁谷議長）

・改めまして、おはようございます。この会が午前中ということはおそらく初めてのことなんでしょうか、先ほど佐々木委員さんとお会いしまして、「新鮮な感じですね」とお話ししながら、ここに階段を上ってまいりました。

連休も終えまして、新緑も深まりつつある今日この頃でございます。今日の会は、新しい年度になりまして第1回目の会議ということでございます。回数も、そろそろ数えてみるという段階に入ってきたのかな、と思います。ぜひ委員の皆様方には、報告書のイメージを少しずつ踏まえながら、忌憚ないご意見、活発なご意見をよろしくお願いいたします。

それでは、本日の会議の議事録署名委員2名を指名させていただきます。第6回の議事録署名委員については、中路委員と星委員にお願いいたします。

次に、傍聴人の取り扱いについて御説明申し上げます。

本会議の傍聴につきましては、審議会等の公開に関する事務取扱要綱が定められておりますが、本日の傍聴希望者について報告願います。

(事務局；丹野社会教育支援班主幹)

- ・本日、傍聴の方はおりません。

(澁谷議長)

- ・はい、分かりました。

なお、審議会等の会議の公開に関する事務取扱要綱第8条により、公開した会議の資料及び発言者を明記した会議録については、県政情報センターにおいて、3年間、県民の方々の閲覧に供することになっております。

教育庁では、私もこの前うかがったのですが、「働き方改革」ということで、本年度より会議は90分で、ということになったということでございます。90分で終わらないのは全て議長の責任であるということでございます。中身がどのようになるか、でも、それはそれとして、そのような方向性ということをお伝えして、これから議事に入っていきます。ご協力をお願い申し上げます。

それでは、さっそく「議事」に入ります。「イ 今後の審議計画について」です。事務局から説明をお願いいたします。

(事務局；吉田社会教育支援班長)

・資料1を御覧ください。第5回では、これまでの審議内容をもとにしながら、第34次宮城県社会教育委員の会議審議テーマを決定したところでございます。第6回となる本日の会議は、第5回で皆様から出された御意見から、「世代を超えて紡ぎ合う」「みやぎらしい」ということについて共通理解を図っていきたいと考えております。そして、今後の方向性とサブテーマについて御審議いただきたいと思っておりますし、テーマに迫っていくための深め方について、本日御協議いただきたいと思っております。

今回はテーマについて審議していくに当たり、意見書の骨子案をお示しするとともに、アンケート調査や、現地視察について御審議いただく予定としております。

8回目以降は本会議から御提出いただく意見書について御審議いただきます。成文化に向けて、場合によっては、小委員会の実施も検討したいと考えております。以上会議の審議計画について御説明いたしました。よろしくお願いたします。

(澁谷議長)

・ただいま資料の1に基づきまして、事務局から説明がございました。これにつきまして、委員の皆様方から質問や御意見等はございませんでしょうか。

よろしいですか。無いようですので、事務局案の通り審議を進めていきたいと思ひます。

それでは、審議のテーマについて入っていきます。「ロ 審議テーマについて」お願いたします。前回の会議で話題になりました「世代を超えて紡ぎ合う」という言葉、そして「みやぎらしい」について整理したいと思ひます。事務局から説明願ひます。

(事務局；吉田社会教育支援班長)

・資料2を御覧ください。1はこれまでの審議内容を簡単にまとめた表となっています。

前回、審議テーマを「世代を超えて紡ぎ合う みやぎらしいコミュニティづくり」と設定いたしました。

これまでの審議で、「社会教育は、地域づくりをはじめとした地域課題の解決に対する根っこの部分になる重要なものである。」ことを全員で確認しあつた上で、「世代を超えて紡ぎ合う」とは、何本も糸が集まつて、その糸が絡み合つて、太く、長く、色とりどりになつていくように、多くの世代が思ひを寄せ合ひ、知恵を出し合ひ協働していくことによつて、地域が活性化していくことと捉え、大筋で合意を得ていると思つております。

「みやぎらしい」ということなのですが、前回の皆様の御意見を参考に、「学びを通して人がつながる。人と人の繋がりから紡ぎ合うこと」で、『震災からの学び』を地域を問わず広げていく。そしてallmiyagiという姿勢で、地域、行政の垣根を越えて、みんなで課題に向かう」ことがみやぎらしいと捉えました。

御審議よろしくお願いたします。

(澁谷議長)

・ありがとうございます。資料の2に基づいて、ただ今、これまでの私たちの協議のものを、ぎゅつと凝縮した形でお示しいただいたところでございます。「世代を超えて紡ぎ合う」とは、ということ。「みやぎらしい」とは、ということ。今回、「みやぎらしい」につきまして、『震災からの学び』という言葉が出てまいりました。

まず、「世代を超えて紡ぎ合う」につきましては、多少文学的表現の感もあるものの、言葉そのものの字面そのものは大きく変わっていないのですが、このようなとらえ方をしてみるとどうか、ということですがいかがでしょうか。

よろしいですか、これにつきましては。

それではもう一つ、「みやぎらしい」に関して、「震災からの学び」「all miyagi」についてですが、「all miyagi」については、何度かこの会の中でも出ました、教育委員会の領域にとどまるのではなく、NPO,新しい動き、それから首長部局等の地域を活性化する動き・地域づくり、などといった観点も入れたら、とうことで事務局が観点に入れたものであると説明を受けました。これにつきましても委員の皆様、御意見をどうぞ。

(委員)《意見無し》

よろしいですか。

それでは、これからの話の中で再度確認したいことや質問等が出てきましたら、そのときに出していただけたらと思います。

現段階で、「紡ぎ合う」「みやぎらしい」につきましても、共通理解が出来たということを確認してよろしいでしょうか。

(委員)《はい、はい、の声》

それでは、次の、今後の方向性とサブテーマには関係がございますので、併せて、事務局説明をお願いします。

(事務局；吉田社会教育支援班長)

資料2 今後の方向性を御覧ください。

今回も大きく「ヒト」「モノ」「コト」で分類してみました。「ひとづくり」の「ひと」には必ず触れていかなければならないと考えています。前回の会議で、震災時のキーマン、若者の熱い思いや力が広がっているという話が出ました。

「モノ」「コト」を分類するのは難しいのですが、指定管理者制度の公民館で、地域づくりをうまくやっているところがある、その要因はなにか、とか、NPOとの連携や、首長部局を核としたコミュニティづくりが行われているところもあり、広い視野で捉えていく必要がある、といったことが今後の審議の方向性と捉えています。

続けて、資料3を御覧ください。

議長、説明の途中ですが、傍聴の方がおいでになりましたので、お願いします。

(澁谷議長)

・来られたのですね。では、入室を許可します。

(事務局；吉田社会教育支援班長)

続けます。資料3をご覧ください。事務局でサブテーマを仮に「震災後の地域活動に学ぶ」と設定してみました。紡ぎ合う、世代を超える、みやぎらしいコミュニティ、萌芽、地域の差、時間軸、行政の壁、震災をきっかけにした(震災前からの)取組、オールみやぎ持続可能、などが、皆様の意見からキーワードとして押さえました。

そして大きく2つの骨子を考えてみました。事例研究。この視点として「よい取組から学ぶ」「人探し・人みつけ」「人材育成」「震災前と後」です。2つ目は社会教育調査の実施と分析です。意見書のまとめの方向としては、宮城県の社会教育施策のバックボーンとなるような提言をいただければと考えております。

サブテーマを仮に設けましたので、これを中心にご審議いただきたいと思います。サブテーマが決まらないうちでも話の方向がぶれてしまう恐れがありますので、これを中心に御審議の程、よろしく願いいたします。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。今事務局から今後の方向性として、これまでに何度か触れられてきましたが、大きな区分けとしまして「ヒト」「モノ」「コト」ということで、これまで私たちの会で出されたことを基に、方向性の案が示されました。

それからもう1点、先程「みやぎらしい」について触れましたが、「震災後の地域活動に学ぶ」いわゆる『震災からの学び』ということサブテーマに設定してはどうかということも示されました。この『震災からの学び』を設定することについて、そして、実際に何を学んだのか、これまでの話し合いの中でも、震災から学んだことがたくさんあるはずだという御意見も出されました。これらについて今日は時間をとりますので、委員の皆様からの御意見をお願いします。

(佐々木とし子委員)

・テーマに関して、私はいいと思います。世代を超えて、オールみやぎ、という取組であれば、今後の方向性のヒト、モノ、コトの中に、私は子育ての方から出てきているので、子どもの育ちの中で、家庭と地域の繋がりの希薄化によって、地域のいろいろな活動とか、伝統芸能とか、そういうものになかなか子どもたちが触れ合えなかったり、地域の大人の人と出会う機会も減少したりしています。できれば、家庭教育も含めて親子がそういうものに触れる・繋がるという部分も、どこかに一語入れていただけるといいな、という感じがしているんです。今の文言では、どうしても、大人同士とか、青年、若者のイメージの文言しかないと思うんですね。やっぱり、子どもたちは、小さいうちから地域の大人たちと出会ったり触れ合ったりすることが、社会教育の中では大きなものを占めると思うと、ここの中にそのようなニュアンスの言葉が含まれるといいのではないかと思います。

(澁谷議長)

・はい、ありがとうございました。

前回のこの会の報告書は、地域を支える子どものことをテーマに掲げ、地域活動の中で、子どもたちが大事な力を持っているか、どのような関わり方が大切か、ということが盛り込まれました。そのことも踏まえて、今回のテーマに入れ込むことも大切ですね。

(坂口委員)

いくつかありますが、「震災後の地域活動に学ぶ」はいいんですけど、「学ぶ」で留まらず、「学び」を、あるいは「学んで」それを何か、という意味に持っていた方がいいと思います。「学ぶ」だけでは、何かこう、止まっているような気がしますので、どう生かすか、とか、生かし方の提言をするんですよ、してますよ、ということに繋がらないかと思いました。どれに繋げるかという、ヒト、モノ、コトに繋げ、それらすべてがみやぎらしさであり、県民性であったり、宮城県のモノであったり、宮城県のコトであったりするということに繋げていく。そしてそれが既存のものだけではなく、これから新しいヒトづくり、モノづくり、コトづくりに繋がる、ということ、震災から学んだことを通して、というように持っていけないかな、と今考えています。

(澁谷議長)

・「学ぶ」にとどまらず、次の具体的なものに持っていく視点を強調したい、ということですね。

(坂口委員)

中身が分かりやすいことが大切だと思うんです。テーマはこれでいいんですが、大きな言葉のあれですから、みやぎらしいとは何か、世代を超えとはどういうことか、何を紡ぎ合うのか、何を学ぶのか、学んだのか、具体的に理解できることが大切だと思います。後半意見書にまとめることも考えて、分かりやすくまとめることを目指した方がいいと思います。

(星山委員)

・今の坂口委員さんの意見に、基本的に賛成なのですが、例えば地域活動だけにとどめないで、むしろ震災後の地域活動を支えた学び、やはり、我々社会教育委員の会議として提起するわけですから、地域活動だけにとどめないで、地域活動を支えたというべきなのか、支えるというべきなのか、「学び」を手がかりにして、いろいろなコミュニティづくりについて提案していくんだ、というふうに変えたほうがよりこの委員会らしくていいと思います。

(澁谷議長)

・このテーマになって、長いこと私なりに考えてみているのですが、ここで、委員の皆さんにお伺いしたいと思っていることがあるのです。それは、ちょうど、震災からの学びということにも関係することです。

『県の生涯学習の推進について 東日本大震災を乗り越えて』という冊子が昨年9月に出されました。その中に、「東日本大震災から学んだこと」という項目が起こされています。

その中で、「日頃からの繋がり大切さ」が指摘されています。具体的には、日頃から学校と地域住民が連携した取り組みを進めている地域が震災からのスムーズな復興に繋がった、と書かれているのです。地域コミュニティの繋がりを支え・支え合うことの重要性とともに、その地域の特徴として4つの点があげられています。1つ目として、「学校が地域に開かれていること」、2つ目が「公民館の役割」、3つ目として「子どもの力」、4つ目が「地域の行事・伝統芸能」とあり、共感しながら繰り返し読みました。

では、「震災から学んだこと」。私たちは、具体的にはどんな事を学んだのでしょうか。私自身自問自答してみました。先程お話しした例は、復興がスムーズに進んだところの特色が示されていました。では、この社会教育委員の会議として目指す地域コミュニティの在り方は、昔から地縁血縁でそういうものが残っているところだから再生がスムーズにいったと仮にしたならば、震災から学んだこととして、そういう再生を宮城県全体でしていきましょう、という提言を申し述べることとなります。無くなってしまったと言われているものを思われるものを、もう一回作り直していきましょう、ということを書けばいい。しかし、昭和30年代のコミュニティ、「三丁目の夕日」のような地域コミュニティの再生は難しい、新しい地域づくりが必要であるという提言もされ、このことを実感しているところです。

「学ぶ」という視点から考えて、昔のものが残っていたから出来たのなら、例えば内陸とか被害の少なかった所などへは、これがエッセンスなんですよ、というように申し述べるのか。ほとんど無くなってしまっているものを再生しようというのか。昔のものをもう一度つくるべきなのか。地域によってその残り方も違いますし、震災の被害も違います。ですから、震災を経た新しいコミュニティづくりを迫るべきなのか？または、その両方なのか…。私自身整理がつかないでいるところです。まず、このような研究をされフィールドをお持ちであろう齋藤先生、星山先生から情報や御意見をいただきたいのですが。

(齋藤委員)

・ちょっといやな感じはあったのですが…。

一時、盛んに「絆」ということが言われました。ただ、絆という言葉には実は別の側面もあって、「ほだし」という意味もあるんですね。つまり、繋がりというものがプラスの面でも捉えられるし、実はそれが漆黒として、「逃れるべき何か」として捉えられるケースもあります。コミュニティにもおそらく同様の側面があり、助け合いという良い面で機能してきた側面もあれば、そうではなくて、そこから逃れたいという部分で捉えられてきた側面、その両面があると思うんですね。

「学んだこと」というと、非常にこれは難しいのですが、震災から6年という時間が経って、一時コミュニティだったりボランティアだったり、すごく盛り上がった時期があって、おそらく今は、その満ち潮みたいなものが引いていっている状態だと思うんです。そのときに、もう一度自分たちにとって、近隣関係であったり地域の関係で

あったり、あるいは地域外のNPOだったりボランティアだったり、地縁という部分では若干違うネットワーク、こういったものはどうあるべきか、一人一人が考える時期に差し掛かっているのかな、と思うんです。ダイレクトに「震災後の地域活動に学ぶ」というところに繋がってはこないんですけど、自分たちにとっての社会の在り方・関係の在り方というものはどういったものがあるのかな、ということも冷静に考える時期なのかな、と思うんですね。

現状でいきますと、例えば災害復興公営住宅で自治会は作ったものの…、その後の活動がついてこない。終の棲家とは言われるんだけど、草取りだってボランティアの手助けが未だに必要。じゃあ、なんのために自治会作ったのだろう？という例があります。行政が言ったから作ったのか、というふうになっちゃってるんだと思います。何のための自治なのか、何のためのネットワークなのか、「何のためなのか」もう一度考える時期に差し掛かっているのかな、と思います。先程の質問や審議テーマとは若干ずれているかもしれませんが、私自身が思っている点を述べました。

(澁谷議長)

・突然振ってしまいまして、すみませんでした。星山先生はいかがですか。

(星山委員)

・「震災後のいろいろな活動から学ぶ」と言ったときには、旧来言われていたことが、震災を通してよりはっきりしてきた、という意味で、「再確認できた」と捉えることが出来ます。地域の様々な助け合いや繋がりが、いかに大事かということを再確認できた部分があると思います。また、こういう面があったんだという新たな発見の部分もあり、これら2側面を整理しておくことが大切だと思います。しかし、その際に、今齋藤先生がおっしゃったように、昔のような地域の人たちの繋がりでいいのかと言うと、人それぞれ考え方が違いますし、繋がりが残っていたところであっても、以前とは当然違っているわけで、そこで話をよく聞いてみると、変わってきたものをどのように現在そこに住んでいる人のニーズに合わせて作り直していったのか、というところが一番大事だと思っています。そういう意味では、繋がりがほとんど崩壊しかけたところでは、どう作っていけばいいのか、何が求められているのか。旧来の形が残っているところと残ってないところ。新たな関係を再構築していく時には、共通の課題が出てきていると思います。ですから、いろいろな状況をいったん分けて考え、それらの共通点を整理していく事が大事であると思います。どこかで人と人との繋がりのようなものを求めてはいるんだけど、それが、議長さんも言った「三丁目の夕日」の世界かと言うと、私もまさにあの時代に育ちましたが、世代によっても違いますし、今の人が同じような中身を求めているかと言うと、違うと思うんです。そこらへんを混同してはいけないと思うんです。

ですから、「何を学ぶのか」が問われるし、難しい人間関係や社会環境を、また作ってい

くときに、地域の皆さんはもちろん学びということを意識していないんですけど、でも我々から見ると、すばらしい学びがあったんだな、気づきがあったんだな、そして新たに自分たちにあったものを作っていたんだな、ということが多く、その点までに深められないかな、と思うんです。抽象的でごめんなさい。

(澁谷議長)

・突然すみません。お二人の先生方にいきなり大きな課題を振ってしまいました。

先生方には、大変分かり易いご説明をいただきました。震災後の地域活動について考えているのですが、くどいですが「震災後に学ぶ」ということを考えるには、今のような問いは避けられないと思います。では具体的には、いったい何を学んだのか。報告書の形にまとめていくには、文字に起こすことが必要になります。事例ももちろん載せていくことになるでしょうが、この会として、何を学んだのでしょうか、そしてその学んだ事をどう伝えるのでしょうか、これらについて、時間をかけて協議をする必要があると感じたので、お時間をいただきました。ありがとうございました。さて、委員の皆さん、忌憚のない御意見をお願いします。

(伊勢委員)

・私は、震災後いろいろなところでコミュニティづくりに携わらせていただいている立場から発言させていただきます。社会教育というところからは、従来の公民館をベースとした地域づくりの中での人材育成であったり、震災後に「何かをしたい」という課題意識・危機感を持って活動し始めたNPO等の団体さんや学校から、地域と繋がりたいとか、子どもたちの良い学びのためにはどのように地域と連携・協働すればよいかなどの相談をいただき、そういった場を作るという活動をしてきましたので、そういった立場から意見を述べます。

共通しているとすごく感じるのは、やはり震災を通して他人事だったものが「自分事」として捉えられるようになった、ということ、それが私は一番大きな事だと思っています。「自分事で捉える」という言葉がいろんな場面で聞かれるようになり、結果的に、所属とか組織とか立場は皆さん違うんですけど、一人一人が主体的に自分事と捉えた人達から声を上げ、行動を起こしてきたと思っています。震災前は、行政主導でちょっとやらされ感や権威的なところもあるのではないかなと思っていましたが、震災の前と後でやっぱり共通しているのは、自分事と捉えて危機感や課題意識を持っている人達が、まず発信して、そこに、どんな町にしたいのか、どんな地域にしたいのか、どんな子どもたち・どんな人を育てたいのか、共通の「思い」を共有して行動してきた人達がいるということ、それが、すごく大きいと思っています。

今、いろいろなところで、人づくりに関わっていますが、一番最初にするのは、その「思いの共有」です。そこから、方法論ではなく「何のために」という、共通の目的を皆

さんと共有することがスタートであると思っています。

では、震災の前と後で何が違って、これから何が求められるのかということですが、やはり自分事と捉えられるような、一人一人の意識変化、一言で言えば、「シチズンシップ教育」なのではないかと思っています。学校教育であったり社会教育であったり、その中でも、「一人一人が一市民として意識を持って、どういうふうはこの町をつくっていくのか」というところが問われているのだと思います。そして共通しているのは、市民意識とか、思いを持った方々が発信をして、そして思いだけではなくて、そこにノウハウであったりネットワークであったりをくっつけてきて、そしてそういう人達が集まって、思いや目的意識を一つにすることで、結果的にコミュニティづくりになっている、個人的にはそう感じています。

一つ、気になっていることがあります。ヒト、モノ、コト、という地域資源を指すと思うんですが、震災後、各地域でその資源の見直しがかかったと感じています。地域にキーパーソンがいて、その人が組織化してネットワークを組んで、ヒト、モノ、コトをどう生かしていくかということが大前提となっていると思っていますので、どんなヒトが関わり、どんなモノを活用して、どんなコトをやってきたのか、それぞれの地域で変わると思っています。

気になるところは、モノのところ、本日の資料の中に「指定管理者制度の公民館でどんな成果が…」という一文が入っているのですが、私に関わっている事例の中では、指定管理者制度をしない動きが広がってきています。指定管理者制度という聞こえが良く、地域の中で自治会や団体が育っているところ、主体性を持ってやっているところに関しては、指定管理者制度がもしかしたらうまくいっているのかな、と思っています。しかし、そうでない所、そういう力が育っていない地域に投げられるとすごく負担がかかり、これが公民館であればまだいいんですが、コミュニティセンター化みたいな動きになっていくと、地域の教育力の衰退に繋がっていくということが予測されます。従って、ここに指定管理者制度という一文を入れることがいいのかどうか、という素朴な疑問が私の中にあります。とりとめが無くすみません。

(田中委員)

・震災から学んだこと。私は、日本人の良さを思い出させたことだと思っています。それは何かというと、「我先に」ではなく、「困ったときはお互い様」ということです。そしてそれを世界に発信できたことが良かったと思っています。しかしそこで学んで、三丁目の夕日に戻るのかと言うと、三丁目の夕日を知っている高校生はいないのです。高校生は、自分たちには何ができるかを考え、いろいろやりました。石巻では学校の枠を超え一緒になって、喫茶店の経営など復興のためにいろいろやっていますが、石巻地区に住んで石巻の高校に通っている生徒だけではなく、石巻から仙台地区に通っている生徒、その逆の生徒、いろいろな生徒が一緒になってやっています。日本人の良さを引き継ぎながら自分た

ちで何が出来るか考えて行動する高校生、そしてNPO。彼らの姿を見ていると、再び前の姿に戻すのではなく、現在の状況で何が大事なのかを模索しながら行動する事こそ大事で、日本人の良さを震災から学んで行動している人達に目を向けることこそが大切だと感じています。

(澁谷議長)

・ありがとうございます。ここでちょっと戻るのですが、先程伊勢委員から、指定管理者制度のことが出されました。これは、言葉だけ見るとうまくいっている所、と読めるのですが、うまくいっていない所も含めて、指定管理者制度を考えるという捉え方でよろしいんですね。この制度が進んできて、様々な成果もあるけれど課題もある、ということは、これまでの話し合いの中でも出てきているものなので、触れないわけにはいかないものです。伊勢委員の話の中でも指定管理をしないような動きもあるということも出されました。そのようなことも含め、今後、必要に応じて調査をかけたりにして、うまくいっていると思われる例、いっていない例、様々な実例を踏まえて議論していかなければいけないと思います。

(相澤委員)

・震災から学んだこと。震災の時私は公民館におりましたので、避難所ということで、最後まで避難者のお世話をしておりました。富谷は今は市になりましたが当時は町でしたので、町役場と行き来しながらお世話にあたりました。富谷町にはその当時45の行政区があり、それぞれの町内会を引っ張っていくのが区長でした。

震災後、行政区毎に動きがあったのですが、それらの格差が非常に大きかったです。ある行政区は、自分たちのことはできる限り自分たちでやりましょう、と素早く動き、いろいろな所と連携をしてどんどん進めていった。一方、ある行政区は、“どうしたらいいのか”となかなかまとまらず、体制が整わない行政区の姿がありました。

そのような中、明らかになったのは、常日頃からキーパーソン、リーダーがいて、コミュニティがしっかりしていた行政区は、目に見えて強く震災後を乗り越えていったということです。そしてそのように乗り越えたことによって、今も、ますますしっかりコミュニティづくりをしていこうという部分に発展してきたと思います。

さらに、震災から学んだこととして、行政の視点から見て、伊勢委員が言うように、「意識」の大切さがあります。緊張感＝備えの大事さ重要さ、これらを実感しました。

最近の北朝鮮のミサイル発射実験についても、県からもすぐにお示しがありました。富谷市でもすぐに全ての学校、関係機関に、対応について発信をいたしました。大丈夫、何かあったら…しよう、ではなく、何かあった時、何をどうするべきか、どこと連携すればいいのか、などと緊張感を持って常日頃備えておくこと、そういう意識を持つことが、行政も私たちも大切だと震災から学んだと思います。また、ある行政区では、中学校と連

携して防災教育を実施するなどの動きがあります。

今回、サブテーマに震災をおいたことで、前回の話し合いでばらばらだった視点が絞られたと思います。調査をかけてそれを落とし込んでまとめていくことを考えると、この流れで震災からの学びを大きい軸にして、地域、行政、公民館、様々な垣根などを越えて、どのように取り組んできたか、震災によって立ち上がったモノ、動きなどを中心に調査をかけ、そして今どうなっているのか、今後どうなっていくのか、どういう方向性を目指すべきか、そういったものを明らかにしていくように進めていってはどうでしょうか。

(澁谷議長)

・震災からの学びを軸として、という御意見でした。はいどうぞ杉山委員。

(杉山委員)

・細かい事なんですけど、「震災から」学んだこと、なのか、「震災後」の地域活動から学んだことなのか。これらはニュアンスが違うな、と思いながら聞いていました。震災後の地域活動から学ぶとしてしまうと、震災の時に気付いたことではなくて、震災後にやった事に学んだこと、と意味になるな、と思います。

私は石巻なんですけれど、私が震災の時に学んだのは、やっぱり「命」ですよ。コミュニティがしっかりしていた所がその後がスムーズだったのは当然ですけど、それ以前にコミュニティがしっかりしていた所では、命の助かった人が多いんです。命に関わることなんです。現代の孤独死について考えても、コミュニティが希薄なことによって助かる命も助からない。「どこのおばあちゃん見たか?」「んで見てくる」という会話は、我々の田舎の方ではあるんですけど、都市部ではそうはいかない。隣近所に誰が住んでいるか分からない。それこそ命に関わります。コミュニティと命は密接に関わっていることをもっとみんな意識すべきだと思います。我々被災地から、このことをもっと発信する必要があると思うんです。ただ、それを大切にして昔に戻るのではなくて、例えばスマホとか新しいハードを取り入れながら、新しいコミュニティ、今風の、若者も出来るような事を考えながら、昔のような濃いコミュニケーションのつくり方を考えていかなければいけないと思います。

(澁谷議長)

・昔にそのまま戻るのではなく、新しい形のコミュニティづくりを考えることの重要性、そういった要素も取り入れていく必要があるという御意見でした。

(坂口委員)

・学んだ事はいろいろありますが、やはりキーワードとしてヒト・コト・モノがありますので、それぞれについて学んだことがある、という事が言えます。そしてそれぞれにつ

いて各論があるでしょうし、それが第1点です。

「当たり前っていいよね」これがまず、私が学んだ、気付いたことです。当たり前ってなぜいいかと言うと、それは生きていることを含めてですけど、これって心地がいいんですよね。で、心地よさって何から来るかっていうと無意識だと思うんですよね。私たちは普段意識して生きていないですよ。意識しない方が当たり前です。人それぞれではありますが。皆、無意識である当たり前のよさは分かった。でも、震災から時間が経って、自分の中に少しはみ出した部分にふと気付いて、それは意識しないと自分では出来ないことだった事に気付いて、それが無意識になれば、それをその人は続けられます。でも出来ない人は元に戻ってしまいます。

ですから、これからコミュニティづくりをするときに大切なのは、いかに意識させるのではなく、いかに意識させないかだと思うんです。それには程良い距離感が大切で、それはヒトに対してだったり、モノに対してだったり、組織に対してだったり。また、その距離感自体も人それぞれですが、「程良さ」、そんな距離感を共有できるコミュニティづくり、モノづくり、つきあい方、これらがこれから大切になっていくんじゃないかなと思います。

(澁谷議長)

・程良い距離感を共有する、というお話をいただきました。かつて濃密だった時代、各種答申等にも書かれているとおり、結果的に私たちは自由度の高い生き方を求めてきた、そういった大きな流れによって濃密さは薄れていきました。私は、隣の家が何を食べているのか分かるような濃密さの中で育ちましたから、できれば、だんだん距離を置きたいな、と思いながら大きくなった自分を思い出しました。やはり程良い距離感、今風のもの、例えばスマホの例が挙げられましたが、そういったものを取り入れたコミュニティづくりが大事なポイントであると感じます。

星委員さん、気仙沼で大変な体験をされましたね。そのあたりを踏まえていかがですか。

(星委員)

・実はこの連休中に、やっとな仮設住宅から集団移転の家ができて、新しいお家に引っ越しました。やっとな家に住むっていいことだな、と実感しています。ですから、今回のテーマはタイムリーだな、と感じているところです。震災時はやっぱり非常時で危機状態ということで、パニックが起きて、自分のことしか考えられない時期でした。そこから通常期になって、早く日常を取り戻そうとして、皆さん当たり前の生活を早くしたい、したいと考えていって、だんだんそれがかなうようになって、パニック状態が落ち着いてくると、だんだん人のことも考えられるようになってきました。人のことを考えるということは、相手のことを尊重すること、このように、認識の変化が起きていることをすごく感じました。例えば、自分のことだけでなく人のことを考える。自分の家族のことだけでなく地域や近所の人のことを考える。今日のことだけでなく明日のことを考える。考え方を変えて

いくとか広げていく、そしてそれを行動に移す。このような変化が見られたこと、これこそ私自身が震災から学んだことだなぁ、と感じているところです。誰かに任せてやってもらうのではなくて、抽象的な漠然としたことではなくて、自分から具体的なことから動き始め、自分が出来ることをやり続けながら今日まで来たなぁ、という思いがあります。

被災地に限らず、宮城県全体で考えても震災ではいろいろな影響があったと思います。地域の課題を解決していくときには、考え方をシフトさせて行動に移すことが大切であることを考えると、ヒト・モノ・コトに通じるのですが、地域資源やキーパーソンを活用しながら、一人一人が自分の地域についてどう変えていったらいいのか考えて行動に移す時期かなと思います。漠然としていてすみません。

(佐々木とし子委員)

・私は家庭教育推進協議会所属なので、子育て・家庭教育のことで言いますと、今回の震災で、自分だけでは子どもは育てられない、地域の教育力が非常に大切である、ということをお母さん方や親御さん方は強く感じたと思います。協力してもらって子育てをするということがすごく大事なことで、地域の人々の力、学校、保育園等の機関の協力はもちろん、やはり自分たちだけで子育てするのではなくて、地域に広げていくということが大切であるということが、家庭教育の面から考えると今回学んだことだと思います。

(澁谷議長)

・ありがとうございました。地域の教育力ですね。はい、鈴木委員さん。

(鈴木孝三委員)

・私は震災当時、沿岸部の学校にいました。被災して、大人は悲惨な状況を目のあたりにしおろおろするばかりでした。しかし、そのような中であって、子どもたちは自分たちに出来ることを探して、一生懸命働いていました。避難所となった体育館を駆け回り、ずぶ濡れになった人に校舎から外してきたカーテンを掛けたり、散乱したものを片付けたり、子守をしたり。食べるものといえば、最初はおにぎりを数人で分けて食べていました。しかし、しだいに国内外から支援物資が届くようになりました。極限の中であって、どんなに嬉しくありがたかったことでしょうか。そんな子どもたちが学んだこと、そしてそんな子どもたちを見て私たちが学んだことは、先程からも出ている、やはり命の大切さです。そして二つ目は自分に出来ることを探して進んで関わることの大切さ。三つ目は、人々の様々な支援に対する感謝の心です。そしてそのようなことから子どもたちには「人の役に立ちたい」という志や思いが芽生えていったようです。

あれから6年が経ち、この1月、その当時中3だった子どもたちが成人式を迎えました。私ちょっと行って再会し、祝って参りました。そして、子どもたちのいろんな話を聞いてきたんですが、「今、市役所で被災者対応しています」「看護師になるための勉強をしてい

ます」「消防士の試験に落ちましたが、また挑戦します」というように、あの頃に言っていたことをどの子ども実現すべく、頑張っているようでした。あの時の学びはそれだけ大きかったんだと実感しています。そして、あの頃、厳しい時間を共有した子どもたちが、あの頃の気持ちのままにいてくれて本当に良かったと思いながら帰ってきました。

このような学びを支えてくれたのは、先程から出ている、昔からの付き合いだったり、日本人的な思いやりであったり、あるいは助け合いの部分だと思います。さらに、当時受験生だった子どもたちがその年、全員進路目標をかなえることができたのですが、これは星山先生、齋藤先生、坂口先生を始めとした大学関係者の方々が派遣して下さった、学生ボランティアの皆さんのおかげです。多くの学生が関わり、勉強を教えてくださいました。どこかの塾よりも手厚く、勉強の楽しさ、分かる嬉しさを味わわせてくれたんです。これは、それまでにはなかった新しいネットワークによるものと言えます。他のボランティアやNPOの人達との関わりもそうですが、それまでにはなかった新しいネットワークから作り出された仕組や取組にも大変お世話になりました。

長くなりましたが。前段で震災からの三つの学びについてお話ししました。そして、それらの学びは、昔からの付き合い等に支えられたものもあったし、新しく、外部との多様なネットワークから文字通り紡ぎ出されたものもあったということだと思います。そうした意味においては、温故知新といった面があったと感じています。

(澁谷議長)

・以前からある濃いコミュニティ、そして学生ボランティアを含めた新しいネットワーク。ご自分の経験を踏まえた具体的なお話をいただきました。

(佐々木淳吾委員)

・諸先生方のお話を伺っていて、サブタイトルに関してこれはこうかな、と思ったことがあります。もしかしたら震災「前」の地域活動、震災「前」に培われていたもの、そこに一つ答えがあるのかな、と思います。復旧復興がうまくいった地域には、どういものが3.11までに培われていたのかということから学ぶことの方が、むしろ震災「後」の地域活動から学ぶという括りよりもいいのかなと一つ思いました。そして、やはりこれはメディアの責任もありますが、こういう事があったから地域の繋がりがうまく行って大変な状況を克服できたとか、うまくいったケースに注目が集まりがちです。でも、単純になかなかうまくいかなかった地域があったとして、その原因がうまくいった地域と裏表なのかというと、実はそうじゃないと思うんですね。うまくいっていない地域があったとして、そこにはどういった復旧復興を妨げる阻害要因があるのかということ、これなかなか難しいですけど、きちんと調べることによって、災害県である宮城として必要な、今後の災害に備えられる地域づくりというものが見えてくるのかなと常々感じています。

(澁谷議長)

・これまでの話の中で、ちょっともやもやしていたものが、佐々木淳吾委員さんのお話で確認できたようです。震災「前」に培われていたものというところに一つ視点を当てる、そして、うまくいかなかった、あるいはいっていなかった地域やケースの分析、これが2つ目の視点。このような提言をいただきましたが、いかがですか皆さん。

(中路委員)

・私も佐々木さんのおっしゃったことに賛成です。この社会教育委員の会議としてどうしていったらいいのか、何を提言としたらいいのか、ずっと考えていたのですが、もう震災から6年も経っているのです、様々なところから、こんな事が良かったよ、こんな事が出来たよ、こんな事が悪かったよと、すでにいろいろな報告があがってきています。ですから、ここで震災後の活動に学ぶのではなくて、震災後どのような活動をしてきたのか、震災後の活動からの学びが大事になると思います。さらに、皆さんのお話の中で出てきた指定管理者制度や公民館。うまくやっているところは元々のコミュニティがしっかりしていると伊勢さんからお話がありました。星山先生からは、コミュニティづくりはやはり住んでいる人のニーズだよ、というお話もありました。

私も震災当時被災地の学校に勤めており、命の大切さというのは強く感じます。ただ、現在勤務しているのは内陸部で、確かに地震の被害、停電や水が出なかったりと、子どもたちも地域の皆さんも大変な思いをしたのですが、沿岸部との思いの違いというものすごく感じます。ですから、命の大切さも含め、昔からの地域の人の繋がりの中でうまくいっている所の良さを、新しい人たちが集まってできた地域にどのように生かしていったらいいのか。どうすることが必要とされているのか。住んでいる人のニーズをつかんで、外せない「震災」というキーワードを絡めた「みやぎらしいコミュニティづくり」について提言していきたいと思います。そのためのサブテーマとして、ちょっと校内研究のテーマみたいになってしまうのですが、このようなサブテーマを考えました。

「震災後の地域活動からの学びを通して」のようなサブテーマにすることで、みやぎらしいコミュニティづくりはこうしていったらどうでしょうか、という提言・意見書にまとめていきやすくなるのかなと思ってお話を伺っておりました。

(澁谷議長)

・具体的なサブテーマの提案をいただきました。ここではせっかく議論が煮詰まっているところですが、県教育委員会からの指示で会議は90分ということが冒頭に示されましたので、終了時刻が迫っております。今サブテーマについて、震災からの学び、震災後からの学び、様々な話をしましたが、皆さんからの御意見をここで一つにまとめてくのは難しいと思います。まだお声を発していない委員の皆様、感想的なものでも結構です、思いでも結構です、お話をいただきたいと思います。

(千葉委員)

・青年団としていろいろな活動をしていて、震災の前から後へ、と考えると、世代を超えての関わりが多かったと思います。県青協としても、そのような活動が震災後多かったと思います。地域で活動していても、県で活動していても、子どもと関わり合っただけの活動であったり、他の団体と関わり合ったりという活動が多かったと実感しています。

いろいろな地域での活動をしていて、それを継続していくことの難しさを日々感じていました。活動や支援によってその時はコミュニティができるのですが、それを同じように継続していけばいいんでしょうが、どう展開していくのか、そういうのがやはり難しいことなんだなと感じていました。サブテーマを見ていてすごく勉強になるなと思いながら、皆さんの意見を伺わせていただきました。

(鈴木正博委員)

・私は出身地が大河原ですが、震災時は職場が塩竈なので、そこで被災しました。震災後、東北本線が開通するまで車で通勤していたのですが、その時、沿岸部と内陸部の格差を身を持って実感する日々でした。地域活動から学ぶというサブテーマであれば、そのような市町村格差や先程お話しがあった行政区間の格差、坂口委員さんのお話にあった意識の違い等、様々な格差や違いを乗り越え、経験則を整理して、オールみやぎという言葉の通り、共通の思い・意識を持っていきたいと思えます。作業的には難しいですが、そのようなことを提言として文章にまとめていきたいと思えます。

(澁谷議長)

・ありがとうございます。それでは、まだまだ話足りないところですが、この後事務局の方から、今後の進め方等も含めて、テーマの深め方についてリサーチをするような計画でございますので、言い足りなかった、時間がなくて伝えきれなかったというものを、事務局の方へ併せてご連絡いただくようお願いいたします。続きまして、テーマの深め方について事務局のお考えをお願いします。

(事務局；吉田社会教育支援班長)

・資料4をご覧ください。地域における社会教育の現状と取組状況、成果と課題を把握し、今後のあり方の提言つなげるために調査を行う必要があると考えております。大きくアンケートによる意識調査と先進的な取組及びモデル事例の把握としての現地聴き取り調査の2つを考えています。

アンケートにつきましては、6月から7月に、公民館、そして首長部局の施設も含めて調査を実施したいと考えております。原案はこちらで考え、皆様とメール、FAX、郵送等でやりとりしながら、6月中には調査用紙を作成し、その後実施・回収し、ある程度集計と考察を行い、後で蛸名から詳しく説明いたしますが、7月中旬に予定しています次回の会

議において検討できればと思います。

現地調査に関しても、その7月の会議の際にご提案したいと思うのですが、これも皆様から御意見をもとに事務局で調査対象地をリサーチし、8月～9月にかけて、全員まとめてボーンと行くわけにはいかないので、15人を何グループかに分けて、グループで調査ができればと考えています。

今回、あまり時間がないところですので、アンケートで調査したい項目、事例として推薦できる公民館等がございましたらこの場でご紹介いただければと思いますが、時間があまりありませんので、資料4にご記入いただき、事務局までお送りいただけますと、こちらで整理し、案をまとめたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

(澁谷議長)

・今の事務局のお話を踏まえまして、今までの話も含めて、アンケート項目にぜひこのことを入れて欲しい等のご希望がありましたら、ぜひこの場でも出していただきたいと思います。また、急で申し訳ありませんが、例えば先程佐々木委員さんからあった、培われたものがあって上手に回っていたコミュニティ、あるいはうまくいっていない事例。まあ、うまくいっていない事例を出してくれと言われてもなかなか難しいのですが、しかし、これは避けては通れないと思いますので、可能な限り認められると思われる範囲で、もしあれば、この場でも出していただけるとありがたいのですが。

(星山委員)

・ちょっと分からないので、いいですか。具体的な事例調査についてはイメージしやすいので、どういう調査をすればいいのか浮かんでくるのですが、意識調査に関しては非常に難しいと思うんです。と言うのは、震災当時はここにいたけど、今はこっちにいる、とか、例えば公民館職員も結構動いてますよね。そうすると、どういう所にいたのかによってもかなり意識は違ってきていると思うんですよ。意識調査となると、そこら辺をこの調査の中でどうしていくのか。

公民館を含めた社会教育施設、首長部局の施設、教育委員会やその他の団体で、自分はどんなことをしたのか、自分の関わったNPOであればだいたい皆継続しているから継続的な意識の変化などを調査できるかもしれませんが、職員の場合はどうするんでしょう。そこところが、イメージできないので、そこについては意見交換をして、調査内容を作り上げていく必要があると感じています

(澁谷議長)

・その辺につきまして事務局お願いします。

(事務局；吉田社会教育支援班長)

・今のような御意見も踏まえ、こういう調査であつたらいいのではないかというところをいろいろ出していただき、整理をしてまとめていきたいと思います。多分、現状と課題の把握が中心になると思います。

(澁谷議長)

・はい、よろしいですか。では、もう少し時間をいただき、原案より時間をかけて、次回あたりにその方法、内容を含めた、ある程度の調査の骨子をお示しいただくということで、よろしいでしょうか。

(佐々木淳吾委員)

・では、調査対象についても、例えば、こういう人に伺ったらよいのではないかという意見も付して良いということでしょうか。

(事務局；吉田社会教育支援班長)

・はい。こちらではなかなか事前リサーチできませんので、具体的な名前なども挙げていただくとありがたいです。

(澁谷議長)

・よろしいですか。他にはありませんか。では、別紙資料4についてお願いします。

(事務局；吉田社会教育支援班長)

・資料4をご覧ください。御意見等ございましたら、こちらに御記入いただいて、お手元の返信用封筒にて、5月19日まで事務局へ返送いただきたいと思います。御協力お願いいたします。

(澁谷議長)

・ちょっと日程がきついです。よろしくをお願いします。続いて報告に入ります。委員の皆様から報告はございませんか。事務局からの報告はございますか。

(事務局；吉田社会教育支援班長)

・ございません。

(澁谷議長)

・はい、それでは、皆様から様々な御意見を頂戴しまして進めることができました。時間が無いところで言い足りなかった、思いを十分に吸い上げられなかったところがあると思いますが、お許しいただきたいと思います。以上で「議事」を終了いたします。ありがとうございました。

(司会；蛭名社会教育支援班課長補佐)

・議事お疲れ様でした。それでは、連絡に入ります。まず、次回の開催について連絡いたします。次回は、7月中旬に開催したいと考えております。具体的には、7月19日を第1候補として皆様のご都合を伺います。お手元の用紙にご記入、提出をお願いいたします。そして、6月の早い時期に決定していきたいと思っております。場所は基本的に行政庁舎会議室か自治会館を考えております。なお、第5回会議記録については、会議録確定版として公開するまでもう少し時間を頂戴します。

その他連絡がございますか？

(事務局；吉田社会教育支援班長)

・2点御連絡申し上げます。

10月30日、31日に、別紙の通り全国公民館研究大会が仙台で行われます。次回の会議の際に詳細をご案内いたしますが、ご予約を開けておいていただけますと幸いです。

2点目です。美術館では、コレクション再発見展を開催しています。美術館でのコレクションの中でも東北にゆかりの深い作家の作品を120点ほど展示しています。是非足を運んで御鑑賞いただければと思います。

(司会；蛭名社会教育支援班課長補佐)

・それでは、以上をもちまして第34次(第6回)宮城県社会教育委員の会議を閉会いたします。どうもありがとうございました。